

立花宗茂

たちばな・むねもち

かつて、二宮金次郎は泥棒だ、その理由は赤貧洗うが如き少年時代を過ごしていたはずなのに、背中に芝を背負って本を歩きながら読んでいた。これは、きっと他人の林に入って枝を落として芝のたばにしているからに違いない、と「歴史の本」に書いた人があって、信じこんだ人も多かったらしい。この作者はこんなことばかり書いていて、たとえば上杉謙信は女だった、とか豊臣秀吉も女だったとか、もう忘れてしまったが、要するに史実と異なる説を唱えては本にしていただけの人で、何を言っても「学説」になるとはいうけれど、あまりにも馬鹿馬鹿しかった。

あるとき、海音寺潮五郎さんが、以上のような意見を書く人もあるが、江戸時代には入会地といって、誰のものでもない、村全体で管理していた山があったのです、だから、金次郎は泥棒でもなんでもないと書いた。その後、いつの間にかいなくなったようである。

海音寺潮五郎さんは、歴史上の人物は申し開きできない立場にいるのだから、できるかぎり悪く解釈することはせずに、いいように解釈するべきだ、ともいう。立派な人柄である。その姿勢がじつにいいと思う。数少ない尊敬に値する人物である。また、あるときには、歴史というものは学問だから、新しい事実が判明したりして進歩するものである。もう僕には時間が残されていないから、これ以上のことは後世の人に委ねます、と **Life Work** である西郷隆盛に没頭されたが、最後の第九巻の途中で亡くなられた。仲のよかった（というよりも、可愛がられた）司馬遼太郎さんが、葬儀委員長を務められた。

長編も短編も全部読んだ。常々、「僕の尊敬するのは、西郷隆盛（大西郷）と立花宗茂だけだ」と言っておられた。坂本竜馬は、軽薄なところ、といったか、こすっからいから、だったか、まあ抜け目のないところが気にいらなかったらしい。しばらく立花宗茂の話をする。逸話だらけの人なのであるが、われわれも読んでいて、じつに爽やかな感じのする人である。

立花宗茂について、海音寺さんの表現では、「あるとき秀吉が多くの武将のいるところで、『天下に豪勇の士は多いが、おれの見るところでは、東では本多忠勝、西では立花宗茂を無双とする、日本武士の双璧だ。』・・・秀吉はほめ上手で、やたら、『日本一』とか『天下第一』とか言って人をおだてたが、これは誇張ではないようだ。・・・ぼくの彼に感心するのはそこ（ここでは武功のことであるが、後述する。）にはない。・・・無類の感があるのは、彼の心術の高朗さだ。出処進退が実に清潔なのだ。・・・それは彼の人柄が清潔にすぎたからで、せめて加藤清正や福島正則ほどの俗気があったら、四十（ジユウ）万石や五十万石の身代になるくらいわけのないことであつたらう。しかし、そうでなかったからこそ、幾百年の後、ぼくは彼を尊敬する気になったのだ。加藤や福島などにたいしては、武将としての一応の価値は認めても、尊敬というほどの気はとてもおこらない。」と述べておられる。

上の部分で、秀吉のほめ上手に対しても、これは誇張ではないようだ、とあるが、他の人が書いた文章でその証拠がある。

・・・戦国時代、薩摩の島津氏が九州征伐を始めた頃のことである。ただひとり抵抗していたのが豊後（大分県）の大友宗麟だけである。その配下に、筑後柳川の立花宗茂や、その父である高橋紹運がいた。宗麟はついに豊臣秀吉に援護を依頼した。このとき高橋紹運は城を枕に討ち死にしたが、宗茂らは頑張りぬいた。

やがて秀吉が九州に上陸し、諸将を集めた場で宗茂を誉めたのである。

「余は先に、大友宗麟の請いにより、九州の戦乱を静めんと欲して御教書を発したが、関白たる余の下知にもかかわらず、・・・・すみやかに命を奉じたのは高橋紹運ならびにこれなる立花左近将監（カシノウゲノ）統虎（ムナヲ:のちの宗茂）のみであった。・・・・父たる紹運は（島津との戦いに）城兵もろとも、玉砕して節に殉じ、統虎また、ひとり立花の孤城に立てこもって義をつらぬいた。

さらに統虎は、島津勢退陣に際しては、小勢をもって追撃し、首（シヅ）数十を揚げたるのみか、高鳥居城をも一日に攻め落とし、・・・・父子そろっての殉節、軍功、ただただ感悦のほかはない。」

「この若者の面魂を見よ。年はわずかに21の若さなれど、西国一の弓取り（註：武将のこと）と申しても過言ではない。東国にあっては、この統虎と肩を並べうるは、本多平八郎忠勝あるのみじゃ。」とまで言った。

（註：ここは説明がいる。この当時、といってもわずか10年ちがっても名前が売れているかどうかは大変な差がある。今でいえば、全盛期の美空ひばりと比べるとよいものである。本多忠勝はすでに40歳、家康麾下（カ）の武将で、その武勇のほどは日本中に隠れもない。その本多と同列にして並べて誉められたのである。名誉なこと、この上もない。たとえば、真田幸村は、今でこそ戦上手で知られているが、大坂籠城の頃にはそれほどの評価ではなかった。当然のことだが父親の昌幸のほうにはるかに信用があつて、だから父親が動くなら味方に馳せ参じる者も多かっただろうが、息子の幸村ではまだ作戦参謀として使えるかどうかわからなかったのである。）

居並ぶ諸将も「見事な若者よ」と誉めない者はなかったという。

以下、海音寺さんの立花宗茂にもどる。

個人的武勇にもすぐれ、兵をひきいての戦さにも天才的といつてよいほどの功妙さであり、朝鮮の役（キ）は前後2回あるのだが、1回目の掉尾（トビ）を飾る戦いは碧蹄館の戦い。蔚山（ウサン）の戦いでも不意打ちで大軍を相手に少人数で散々に蹴散らす。敵の捕虜も全部逃がしてやる。すると、相手は小勢であると敵にはわかっているから、「今夜、敵襲があるぞ」と準備して待っていると、案の定なので、これまた散々に破った。碧蹄館の戦いでは加藤清正らもいたのだが、立花の働きがもっとも華々しかった。このおかげで、日本軍の多くが日本に帰ってこられたのである。

関が原の役では、当然秀吉の義に感じて西軍である。関が原では、大津城をおとしてそ

の守護にあたっていたが、鉄砲隊の働きの見事さに諸軍目をそばだたせたという。決戦場にはでなかった。そのうち、敗軍の連中が続々と西を目指す。宗茂もやむなく西へ進んでいたところ、大坂方が、宇治川にかかる瀬田の唐橋において焼き落とすところであった。宗茂は驚いて、「それはもってのほかのこと。源平の昔より、東国勢の京へ攻め上って来るのを防ぐために、京方では定まってこの橋を落としたものじゃが、それによって利を得たためしはかつてない。諸人のなやみ、国の費えとなるだけのこと。わしはこれから京へ行くが、わしが京にいるかぎり、必ずしかと防戦する。橋のあるなしにかかわらぬ。焼くこと、固く無用にせい」

これを聞いた家康が、「立花は聞いたよりもはるかにやさしき心掛けの者である」と感賞したとつたえられる。……\*誰に聞いたのだろう。

大坂城にもどって、毛利や増田といった将校に籠城（ロウジヨウ）しようと言いたが、はかばかしい返事をしない。ついに腹を立てて、「さてさて、揃いも揃った腰抜けだわ。かかる人に頼まれて、人よくも一味して馬鹿骨おったおれが愚かだったのだ。」と帰国してしまった。大坂あたりから船に乗って帰国のときに、やはり西軍に味方して命からがら国に帰る島津維新（シマヅ）の一行と同じ港に停泊した。

島津は、九州征伐を企てたが、秀吉の前にやむなくあきらめて、薩摩の国を賜る（タマル）ことになった。朝鮮の役の最後の戦いは泗川の戦いである。このときの島津の働きは朝鮮人、明国（シヨク）人の間にシーマンズ（石曼子）という名で広く知られるようになった。なにしろ20万人対5千人である。ここでもこの働きによって他の日本人が帰国できたのである。

関が原の話や、いろんな話がでたが、今九州には、東軍に荷担した黒田如水（官兵衛）肥後熊本には加藤清正がいる。島津維新は宗茂に薩摩に来ることを勧めたが断った。関が原には1000人の藩士を連れて行ったが、帰りの船には80人しかいない。（この間の話は、海音寺さんが、別のところで、中馬大蔵の話として書いておられる。）

宗茂の家臣の誰かが、島津は手薄である。父高橋紹運の仇である、攻めようと言ったが、宗茂は、「無用にいたせ。島津とのことは、故太閤殿下のとりなしで話はすんでいる。さらに、「……考えてもみよ、こんどは同じく秀頼様にお味方して、不幸戦いに敗れて帰国する途中だ。相手の備え少ないにつけこんでこれを討ち取るなど、おれには薄ぎたないことの第一に思われる。家運が傾いたり、負け戦になったりすると兄弟喧嘩が出たり、味方割れしたりするのは世によくあることじゃが、おれは見苦しいと思っているのだ。あれと同じことであるとは思わんか。……男のふるまいほどこまでもきれいでなくてはいかん。」

結局、九州でも誰も手は出せない。攻めても被害もでるから、知らぬ顔をしている方がいいにきまっているのだ。

柳川で、のちに家康の命で、加藤、黒田、鍋島らが攻めてきた。鍋島がもっとも早くきて、鍋島の十二段構えの九段まで突き崩したがついに力尽きて、引き返した。このときの殿軍（シガリ）も見事なもので、戦さでもっともむずかしいのは逃げるときの殿軍である。

「整々として一糸も乱れぬ退却であったので、鍋島勢はあとを慕おう（ワッカルこと）とはしなかった」とある。

その後、加藤清正から、いんぎん（懇懃）懇切をきわめた文面で開城を勧めてきた。・・・まず、宗茂の武勇と人格の高潔さをたたえ、日本武士の鑑とまで言い、これほどの武將を空しく討ち死にさせることをかなしみ、あわせて誠忠な家臣等の殉節をいたみ、一転して、宗茂殿の武士としての意気地は、（鍋島との）八の院の一戦においてもうたったではないか、云々。

宗茂一行が柳川から肥後へ行くとき、百姓らが庄屋を表にだして、行くな、このまゝいてほしい、と泣いてとどめたという。

・・・清正が出迎え、馬を並べて歓談しながら本陣にかえった。そこに饗応の支度がしてあって、互いに酒を酌んで深更に至った。

この時、宗茂の清正に対する態度が少しも平生と変わらなかったのも、清正の家臣等が、「さすがに大明・高麗の人々にまで恐れられた立花殿である。いかなる豪気な大将でも侍でも、かような時には少しは悪びれる風のあるものであるが、平生よりもみごとな立居ふるまいでおわす」と感嘆したと伝えられている。

加藤清正の薩摩征伐にも誘われてものらなかったし（\*関が原後の船の中で味方であると宣言している）、また勝ったら玉名郡一帯を進呈するともいわれたが、「貴殿より賜るなら、肥後一国を賜りましょうとも、お受けは出来ませぬな。ま、御芳志だけをお受けしておきましょう」笑いながらであるが、中身は辛辣である。清正は慚然として立ち去った、とある。

慶長七年、宗茂の若い頃からの家臣である由布雪下、十時攝津ら 19 人がどうしても宗茂と行をとものにしたいというので、のこる家臣を清正に委託し、京にでた。このあたりの関係は、主従だから、とか義務だからとかいうのではなく、親兄弟友情恋人に類するものであったのではないかと海音寺さんは推察している。

さしもの清正の餞別も、人数が多いから底をついてきた。家臣らはおかゆにしたり、雑炊にしたりしていたが、宗茂にはふつうのご飯をだしていた。あるとき、どうしても米がなくなったので、雑炊にして宗茂にだした。すると、宗茂は、「いらざることをいたす。飯のままで出せばいいのに汁かけ飯などにして出す。汁をかけたるがほしくば、おれが自分でかけるわ」

\* ここは意見がわかれるところであるが、子供の頃からの殿様だから、家臣の苦勞が理解できない、所詮は殿様の限界という考え方がひとつ。もうひとつは、身は落魄していても精神までは墮落していない、いずれ時代がくれば再び武勇のほどを見せてやる、という気概をしめしたものの、という考え方である。小生は、両方あったと思うし、家臣らの苦勞も偲ばれる。殿様に余計な気苦勞をさせないようにと配慮していたのだ。家臣らは涙を流して感激したという。

また、あるとき、前田利長の家来というのが来て、どうせ何万石で召抱える、といっ

た話に違いない。ふつうなら、客間に通ってもらって話を聞く。ところが宗茂は、庭に通せという。使者はいろいろ言って 10 万石でどうかという。家臣らにしてみれば、とびつきたい気がする。宗茂は、聞こえるともなく独り言のように、「憎いやつめが。腰抜けの分際して、いろいろなことを申す」・・・使者は赤くなったり青くなったりして帰る。

その後、江戸に出た。いろんな仕事をさがすのだが、結局十時攝津の虚無僧がもっとも稼ぎになった。いろいろな話があるが、十時攝津が無法な浪人にからまれて 3 人を切っけてすてたことから、筆頭老中土井大炊介（材刈）の知るところとなり、攝津は宗茂にはまったく関係のない刃傷沙汰であることを言って泣いて宗茂を庇おうとした。宗茂は、この話を聞いて、「よくやった、おれが誉めてとらす」と、幕府の、あるかもしれない咎めなど気にもしなかった。そして、秀忠のお側衆に召し出され五千石である。このときには、家臣の苦勞もわかっている。ありがたくお受けした。

さらに、翌々年、奥州棚倉一万石、14 年後には、もとの柳川十一万石余の城主になってもどった。関が原から 20 年目 52 歳のことである。

ちょっと、これほどの高潔な人格の人物は歴史をみても、中国にはあるいはいるだろうか。不安になるが、日本人にもいるだろうか。 2000. 6. 26.

ところで最近、戦前・戦後の日本の話を読むことが増えて、ふと、白洲次郎さんのことを思い出した。すこし宗茂のことを思い浮かべた。白洲次郎さんは、ご承知のとおり、敗戦後の日本にあって吉田茂に呼ばれ、GHQ とともに対応した、ほとんど唯一の人である。2006 年にわかにブームがやってきて、その活躍が広く知られるようになったことは喜ばしいことである。「プリンシプルのない日本」とかの著書がある。プリンシプル Principle は、直訳すれば原理・原則などであるが、わざとそのまま使っておられる。「筋を通す」の『筋』がもっともふさわしい訳かもしれない。白洲次郎さんでワタシの大好きな話が残っている。

GHQ 民生局長のホイットニー准将が白洲をつぶしたがっていたことはわかっていた。唯一抵抗する日本人である。おまけに白洲が、ホイットニーを心底では二流以下の人物だと馬鹿にしていることはなんとなくわかる。・・・そこで、ある時白洲に向かって、「あなたの英語は大変立派な英語ですね」 白洲は即座に、自分が留学していたイギリスで話していた、つまりキングス・イングリッシュのなかでもとびっきりのを使って、「あなたももう少し勉強すれば立派な英語になりますよ」

これがなぜすごいことなのか。・・・米国人が日本人の英語を誉めるのは、相手が初心者であるときや、慣れた人にもお世辞が多分にはいつている。われわれでもあるやろ、日本語の上手な外国人に向かって、「お上手ですね」という表現。実際には外国人の話す

日本語だから、日本人の話す日本語と異なることはよくわかる。・・・あるいは相手が白洲ほどの英語の達人になれば、貶（け）していることになる。英語が上手な人に対しては、上のような誉め方は絶対にしないし、裏ではひそかに英語の歴史もふまえた上での「いやがらせ」がまじっている。また米国と英国とは同じ「英語」でも微妙に異なっている。発音も文法も英国伝統の方が上とわかる。だから、白洲は、怒るよりも本物のキングス・イングリッシュを自在に使いこなせるところを実地に証明したわけで、そのことはホイットニーには当然わかったはずでグーの音もでなかったろう。だからすごいのである。戦争には負けたが奴隷になったわけではない、という白洲次郎さんの矜持が伺える話である。